

3. 沿革

この地域にいつ頃から人が住みはじめたのかは定かではないが、縄文時代前期になると、旧飯沼の沿岸部に集落が形成されたことが数多くの遺跡から分かる。弥生時代の中期になると関東にも稲作が広まり、大規模な農業共同体集落が形成されるようになった。

平安時代になると、平家一門から「平将門」が出現し、承平5年(935年)に岩井の地名のおこりとなった石井に営所を築いた。将門は天慶2年(939年)に常陸国府を討ち、さらに下野・上野の国司を追放して関八州を手中に治め、新皇と称した。

しかし、天慶3年(940年)藤原秀郷、平国香の子貞盛に攻められ、岩井の北山付近で戦死したといわれている。

鎌倉幕府の成立とともに、関東は一気に政治の表舞台に躍り出る。本地域を含む下河辺庄は、幕府の御家人下河辺氏が治め、その一部は幸嶋氏に受け継がれていくことになった。鎌倉幕府の力が弱まると、常陸国を中心とした関東における南北朝の争いが激化し、暦応2年(1339年)7月には飯沼の南方の下河辺庄一帯で合戦が行われた。

荘園が発展した鎌倉・室町時代にかけては、各所に親鸞上人の足跡が残っており、この地方の教化の中心となっていた。

戦国時代には後北条氏が北関東侵攻の拠点として天正5年(1577年)に飯沼城(逆井城)を築城するが、天正18年(1590年)に本拠地の小田原城を豊臣秀吉に攻略され滅亡、飯沼城も廃城となった。

江戸時代には下総国関宿藩の支配(一部天領)を受け、主に猿島地域は猿島郡上郷、岩井地域は下郷と呼ばれていた。享保年間には飯沼新田の開発が行われ、さらに流通経済の発展にともない、猿島茶に代表される商品物産の生産も盛んになった。

明治維新以後廃藩置県を経て、明治8年には茨城県に属し、明治22年の市町村制の施行により11の新しい村(岩井8村、猿島3村)となった。

昭和30年に1町7村(岩井町、弓馬田、飯島、神大実、七郷、中川、長須、七重各村)が合併して岩井町、生子菅村と逆井山村が合併し富里村となり、翌31年に沓掛町と富里村が合併し、猿島町となった。翌32年には石下町の孫兵衛新田、左平太新田、栗山新田の一部を猿島町に編入し、現在の行政区域となった。

さらに昭和47年には県下18番目の市制を施行し岩井市が誕生した。

平成17年3月、合併特例法に基づき、岩井市と猿島町との合併により坂東市が誕生し現在に至っている。